

シェアハウス(以下、シェア)と呼ばれる家族でも恋人でもない他人との共同生活が、日本でも注目されている。

もともと欧米では、収入の不安定な若年期に他人と同居をシェア(共用)することは、家賃や光熱費の節約の点でも合理的で、一般的な選択であった。しかし、ワンルームマンションが主流の日本では、シェアはほとんど普及してこなかった。

### ■孤立求めてきたツケ

他人との共同生活と聞くと、昔ながらの長屋暮らしや居候を思い描く人も少なくないだろう。ほんの数十年前(1970年代)ば、日本にも家族を超える他人との共同生活や近隣との支え合いがあり、同時に伝統や地域のしがらみがあった。そこから逃れるようにして、戦後の日本は近隣と顔を合わせなくとも、夫婦で閉じこもっても、たった独りでも、カネさえあれば何不自由なく暮らしていける社会を作り上げ

た。二〇〇五年の経済協力開発機構(OECD)報告書によれば、家族や同僚以外の友人・知人と「全くつきあわない」「ほとんどつきあわない」と答えた日本人の割合は

15%を超え、先進国で最も高い。

しかし現在、長引く不況と晩婚化・非婚化を背景に、私たちは伝統的な共同性から逃れ、孤立を求めてきた時代の

## シェアハウス 共同生活の再発見

久保田 裕之



定例会を開く東京都内のコレクティブハウスの入居者たち。NPO法人コレクティブハウジング社提供

ツケを払わされている。どれほど割高で非効率でも、家族と暮らすか一人で暮らすかしか選択肢のない状況は、若年ホームレスや独居高齢者問題の一因となっている。家族にしか頼れない社会で、頼るべき家族を持たない人は、誰にも頼ることができないからである。ひきこもりやニートといった家族と居住をめぐる問題もまた、家族にしか頼れない社会の裏写

しといえる。

それゆえ、近年のシェアの普及は、家族中心で孤立主義的な価値観の揺らぎとも関係している。たとえ経済的な利点があったとしても、一人暮らしは本当にコストに見合うのか、家族に閉じた生活は息苦しくないのか、他人と話し合い助け合って暮らすことも可能なのではないかという新しい価値の模索なしに、シェアが拡がることは難しい。

### ■自治と協働で合理化

同時に、共同生活の現代的な再発見は、単なる過去への回帰とも異なっている。自分だけの個室を持ち、その外にリビングやキッチンを共用するタイプのシェアが一般的であるのも、個人のプライバシーと生活の共同性との間でバランスを取ろうとしていることの現れだろう。伝統的な共同性やしがらみを拒否することは、必ずしも、より自由で民主的な共同性まで否定することを意味しない。

家族を超える共同生活に、

古くて新しい価値を見いだしているのは若者だけではない。自治と協働による生活の合理化をコンセプトにした多世代型のシェアは、特にコレクティブハウスと呼ばれ、現在都内でも四つが運営されている。一例を挙げれば、単身者から高齢者、子育て中の夫婦まで数十戸が集まり、業務用のキッチンや広々としたリビング、屋上菜園等を共用して暮らす。設備面のみならず、週二回の夕食の共同や、居住者全員が集まる月例会議も開かれる。個人を基調としながらも、単なる「親睦」や「交流」を超えた民主的な生活の共同性を育んでいる。

### ■「生」を支えるため

居住者にシェアの魅力を尋ねると、都内が帰宅困難者で溢れた東日本大震災の夜、大勢の仲間と共に居られたことの重みを口々に話す。私たちが「生」が、決して一人では、決して家族だけでは支えきれないことに、人々は再び気づき始めているのではないか。

歴史を紐解けば、古代ギリシャの人々が部族や村落を超えて集まり、話し合い共に暮らし始めたことが人類に最初の民主主義をもたらした。翻って現在、なぜ人々が集まり共に暮らすのかをあらためて問い直す必要がある。

くぼた・ひろゆき『大阪大学大学院助教・家族社会学 1976年生まれ。著書に『他人と暮らす若者たち』。